

週 報

こひつじ

第41巻 24号
 大津キリスト教会
 菊池郡大津町室 119
 TEL 096-293-4470
 FAX 096-293-4961
 牧師 米村 英二

いま私たちは神の子どもです

私たちが神の子どもと呼ばれるために、――事実、いま私たちは神の子どもです。――御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょう。(一ヨハネ三の一)

その一 神の子どもであるとは

私たちはだれか。何ものか。校で学んでいたとき、そうか自分これはだれにとつても大きな問いは日本人なのかとあらためて思ったことがある。

その問いに答えてヨハネは言う。その学校には、一九カ国からや私たちは神の子どもであると。つて来た五、六〇名ほどの学生がそして神の子どもと呼ばれるためいた。たいていはヨーロッパからにどれほど大きな神の愛を賜ったで、イギリスで英語と聖書を同時に学び、その後、アジアやアフリカに宣教師として出かけようとする若者たちだった。そのほか、アメリカの国々やインド、パキスタ

私たちに、その自覚があるだろうか。

考えてみれば、私たちは神の子どもである以前に日本人でもある。その自覚はどうだろう。

五〇数年前、イギリスの聖書学

する日本人は少なかった。したが

ってほとんどの学生にとつて日本人を見るのは私が初めてだった。彼らは、私の行動を見て、それが良くても悪くても、「ああ、日本人はそうするのか」と思うだろう。私は日本人を代表していたのだ。

そのとき、突然、私の心に、よい意味での日本人としての自覚が沸き起こった。

私は思った。何としても日本人として恥ずかしい生き方をしなければならぬ。

内村鑑三が「私は日本のために、日本は世界のために」と言った意味がわかったような気がしたのである。

こうして日本人としての自覚は、私を、自分という狭い枠を超えてもっと広い社会に投げ入れてくれた。

それなら神の子どもであるという自覚はどうだろう。私が神の子どもであるということは、神が私の父であるということである。

クリスチャンになって、そのことを知ったとき、それは、私に大きな衝撃を与えた。

私はそれまで、自分の肉の父や

母の期待に沿うことが自分の最大の義務であると考えていた。ところが神が父であるという思想は、自分の存在の起源が、肉の父や母をはるかに超えて、神にあるということを教えてくれたのである。

私は、親からでもあるが、それ以上に、神から来たのだ。それから、だれよりも神に責任を負う生き方をしなければならぬのではない。自分のためでも、家族のためでもなく、もっと広い世界のために造られているのだから。

そう思ったとき、私は神に自分をささげようと思った。

そこで私は父に言った。「ぼくを神学校に行かせてください。生きがいのある仕事をしたいのです」

父は烈火のごとく怒った。

「生意気を言うな。好きでもないこの仕事を私がやってきたのは何のためだと思っている。おまえたちを養うためではないか。みんな苦労して生きているんだ」

当時はまだ食べることで精一杯で、生きがいのある仕事を求めるというのはぜいたくなことだった

のだろう。

私はやむなく大阪のシャープという会社に入社した。それでも金銭を超えた何かのために生きたいという思いは日に日につのり、抑えきれなくなった。三年後、伝道の道に進む決意を固め、とうとう会社をやめた。

親は落胆した。

それからの私の人生は、親が全く想像できないものだった。

そのとき私の心を動かしていたのは、もはや人生の成功や幸福ではなかった。神は私に何を求めておられるかであった。

親は、そんな私の生き方を理解できなかっただろう。

しかし、のちに、私の生活をつぶさに見た父は、

「今、何かの宗教を持てと言われるなら、私は迷わずおまえの宗教を選ぶだろう。キリスト教はほんものの宗教だ。おまえの生活を見て、それがよくわかる。私が死んだらキリスト教で葬ってくれ」

そう言い残して亡くなった。のちに新島襄の自伝を読んだとき、彼も同じ体験をしていたこと

を知った。

鎖国時代に、日本脱出を試みたけれど、それを押しとどめようとする別の力が強く働くのを感じて、彼はなかなかその一歩がとれないでいた。

その力とは、そんなことをすれば、彼の祖父や両親がどんなに悲しむだろうという思いだった。

しかしやがて一つの考えが彼を自由にする。それは、天地を造られた神が、彼のほんとうの父であるという思想だ。

「私の両親が私を生み、育ててくれたが、私はほんとうは天の父に属している」

その考えが彼の心を占領したとき、彼は言った。

「私は、もはや私の両親のものではなく、神のものだ」

その瞬間、彼を父の家に強くつなぎとめていた強じんなきが断ち切られた。そして彼は次の決意に達する。

「私は自分自身の道を進まなければならぬ。地上の両親に対するよりも、より以上に天の父に対して仕えねばならない」

こうして天地創造の神こそは自分のほんとうの父だという新しい考えが、彼を勇気づけ、藩主を捨て、故国を一時離れる決意をさせたのだと、彼は自伝に書いている。

それ以来、彼は公人となった。そして自分のためでも家族のためでもなく、神のために生きるという道へと導かれていったのである。

(続)

今日の礼拝

○午前一〇時半から合同礼拝です。教会学校も午前一〇時半から。

○証と勧めは小堀久男さん。

先週の礼拝

○先週の司会は合志文利さん、説教は米村牧師。ルカ福音書四章から、荒野の誘惑について。私たちがひとり部屋にいるとき、そこには神がいつもいてくださいます。

またときどき悪魔もいる。どちらの声に耳を傾けるのか、それが私たちの人生を決定するのだと語りました。

先週の礼拝参加者

礼拝参加者は、第一礼拝が五十三名、第二礼拝が二十七名。合計八〇名(男二九、女五一)。それに子どもが九名。合わせて八九名でした。

牧師身辺

アメリカから来た娘家族の一〇日間の滞在は楽しくもありましたが、妻は、やはり疲れたのか熱を出してしまいました。妻が回復した頃、今度は、ぼくが熱を出し、三日ほど寝込みました。ふたりとももう若くはないんだなとつくづく思いました。今回は頭痛がひどく、本も読めず、ただひたすら寝ているよりほかなく、苦しい思いをしました。四日目には熱がさがり、こうしてこの原稿を書いてるところです。

礼拝を休まれた方には週報を毎回お送りしていたのですが、今回は、それができず、また家庭集會もお休みとなり、もうしわけありませんでした。